

進化する畜産

岸本昌久[†]（岸本家畜病院院長・鳥取県獣医師会会員）

大学を卒業して酪農家の跡継ぎの長男として生まれ育った鳥取の地に戻る際、病理の研究室に在籍し顕微鏡で組織標本を見ていた私が産業動物獣医師になることに何の迷いもなく、当然のように農業共済の診療所に奉職を決めた。それから15年在職したが、転勤先でふと「死に場所が違う」という思いに駆られ退職して開業することになった。

鳥取は、夏は高温で全国版のニュースの常連になるような猛暑、しかも多湿。冬は一晩でドカ雪が降り積るため、牛舎まで車で辿り着けず、搾乳より先に除雪が必要となるような土地である。そのため乳牛を飼うのに適した環境とはいえないが、日頃の努力や工夫により酪農業を軌道に乗せている事例を紹介したい。

1 WCS（ホールクロップ稲ワラサイレージ）事業

発端は堆肥の処理問題であった。各酪農家では堆肥処理設備を導入し、失敗しながらも徐々に堆肥化を進めきたが、水田地帯のため散布希望農家が少なく堆肥は飽和状態になり、自分たちで散布面積を増やすこととした。そこで以前から酪農家が設立していた畜産農協を利用して会社を立ち上げた。事業を成功させるため種々の努力がなされたが、事業を軌道に乗せるまでの問題点は主に二つ、季節雇用労働と飼料の給与方法であった。まず、季節雇用労働については、最初は春に堆肥散布し、秋に収穫する季節雇用のみであったが、冬場にも堆肥散布をしながら種々の作業に取り組み、今では、会社として常勤雇用が可能となり圃場の委託栽培を実施することができた。また、飼料の給与方法については、試行錯誤の連続であった。嗜好性は良いが給与を制限しなければ乳量を低下させてしまう。その結果、育成牛や肉用牛への制限給与の実施に辿り着いた。現在ではカッピング技術・ラッピングを含めた保存方法等のさまざまな開発・改良がなされ、飼料としての価値が数段進歩し可能性が広がっている。

このWCSを軌道に乗せるよう献身的に給与実証をしたKファームは進取の気性があり「乳房炎や蹄病になるホルスタインをなぜ作ったの？」と言ってブラウンスイ

スxホルスタインのF1メス牛の搾乳を開始した。確かに初産牛では概ね25～35kg/日、全く乳房炎も蹄病も発症しなかった。彼は同居するホルスタイン雌牛の蹄病を治療する私の横で誇らしげであったが、2産目からは乳房炎と蹄病が徐々に発症して、あまりこの話題に触れなくなった。ただ、2産群になっても重大な産後の疾患は未だ皆無で、淘汰対象のF1乳牛は搾乳困難牛以外に出現していない。

2 和牛の人工哺育

きっと和牛農家も多頭飼育になる。その時に重要なのは哺育技術だと認識していたが、20年前の開業直後、繁殖・肥育一貫の農家が増頭し哺育牛の下痢が多発するようになったT農場で、和牛の人工哺育技術の導入を提案した。重要なのは初乳からの移行抗体と保温であったが、酪農家と契約して、ワクチン接種をした乳牛の初乳から出荷までの全乳を買い取りと、また上下からの温熱ヒーターの導入で解決した。これにより母牛も吸乳刺激による発情遅延が回避され、分娩1カ月での授精が可能となった。その結果、平均分娩間隔は1年1産以下になった。今もこの農場で初生子牛の下痢で治療する機会のごくまれである。

3 石灰乳による蹄浴

N牧場と付き合い始めて、蹄病の蔓延が目立ち始めていた。蹄浴は規則正しく実行していたが、その当時使用

岸本昌久

—略歴—

1978年 山口大学農学部獣医学科
卒業
同年 鳥取県農業共済組合連合
会
1993年 開業



[†] 連絡責任者：岸本昌久（岸本家畜病院）

〒689-1126 鳥取市美和128-1

☎0857-53-1802 FAX 0857-53-1804

E-mail : kishinotokatikubyouin@msn.com

していたのは市販の蹄浴剤であった。そこで、硫酸銅は土壤中に蓄積するので使用は控えるよう指摘していた。すると牧場主が鳥取家畜保健衛生所に相談したところ、消石灰を蹄浴に使用することを推奨され、同家保の職員により既に発表されている「pH12の上澄み液」が著明な効果を発揮することがわかった。N牧場では2列の蹄浴槽の消石灰の交換を規則正しく（カレンダーに記されているとおりに）行っている。このため、現在飼育する100頭あまりの搾乳牛がPDDや趾間フレグモーネを発症することはない。ただし、蹄浴槽を通過しない乾乳牛・初産牛の初期に発症がみられる。他の農家でも推奨したが、定期的交換が困難で何れも中止している。

開業時「Production Medicine」に啓発され、「Brown Arm」はもう古いと言われ、納得して開業したはずが、やはり農家と寄り添う臨床家でなければ鳥取では生活できなかった。そしてその中で少しずつその技術を伝道し、農家のレベルアップを図り、それなりにレベ

ルは進歩してきた。その結果、病気の形態も徐々に変化してきて、現在往診している農家においては、乳牛の産後疾患・乳房炎・初生子牛の腸炎は減少し、蹄病が蔓延し、昨冬はそれまでワクチン接種により予防していた子牛の肺炎が一挙に増加した。おそらく長期間の低温に牛舎環境が対応できなかったのではと反省している。そこで臨床家は変化し続ける病気に対応する能力が要求されていると感じた。さらに現在の畜産農家にとって規模拡大がひとまず落ち着き、経営の合理化も進展した今では、次なる障害は、おそらく経営スタッフの充実ではないだろうか？ アルバイトやパートでは物足りない。頼りになる、一時期経営者が休息する時（長期の休養や病気等）に安心して牧場を任せられるカウボーイが必要と思われる。そのような能力の高いカウボーイを輩出する機関が存在する地域では、畜産を次なるステップへと進化させられるのであろう。鳥取でもこのような機関の創設を望んでいる。